

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

—ヘルマン・パウジンガーの日常研究に注目しつつ—

河 野 眞

目次

- (一) はじめに—比較の対象を揃えるのが望ましい
- (二) フェルアインに代表される中間集団の密度が高いドイツ社会
- (三) 独和辞典における「フェルアイン」の説明
- a. 郁文堂『独和辞典』
- b. 小学館『独和大辞典』
- c. 三修社『新現代独和辞典』
- d. フェルアインの特徴
- (四) 法人格(社団法人)としてのフェルアインとその訳語
(経済団体としての組合)
(学会組織としてのフェルアイン)
- (五) 西洋に共通な結社としてのフェルアインとそれへの注目の古
 典的な事例
- (六) 日本でも知られているドイツのフェルアイン—サッカー・チームを例にして
- (七) 地域社会におけるフェルアイン—《ドイツ人は三人よれば「フェルアイン」》
- (八) クラブ・組合と行政
- (九) 学校児童のスポーツの担い手としてのクラブ・組合
- (十) クラブ・組合のマイナスイメージ
- (一一) クラブ・組合形成のモデルケース—『新しい移住団地』から
(事例) シュトゥットガルト—ロートヴェーク移住団地
- (一二) 保守化するクラブ・組合をめぐる攻防から
- (一三) 集団形成の東西比較へのスケッチ

注 文献

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

(一) はじめに

―比較の対象を揃えるのが望ましい

筆者は先に二編の小文によって、西洋社会と日本社会の比較として一部で行なわれている論説に疑義を呈した(河野二〇一四 河野二〇一七)。問題と考えるのは、西洋は社会であるのに対して、それに照応するのは日本の世間という論である。その検討はここでは繰り返さないが、洗い直しを通じて明らかになった問題が本稿のテーマである。それは、西洋Ⅱ社会 vs 日本Ⅱ世間を説く人々が、西洋は《個人という主体》とそれによってつくられる大きな《社会》という構図を描いていることである。それに対して日本については《同窓会、会社、俳句の会、文壇、大学の学部、学界……隣近所や年賀状を交換したり贈答を行う人の関係》が挙げられる。これらが世間にあたるかどうかともかく、日本についてはいわば《中間集団》が強調される。逆に、西洋の《同窓会、会社、俳句の会、文壇、大学の学部、学界……隣近所や年賀状を交換したり贈答を行う人の関係》(俳句の会は仮に「読書クラブ」あたりで置き換えてもよいだろう)は視野に入っていないようである。比較をうたいながら、照応するものが挙げられない。これらの諸集団や諸関係を引き合いにするなら、西洋の《中間集団》や隣近所の実態が問題にされるのでなければならぬ。それを欠いたまま《西欧的な意

味での社会と個人というものが日本には成立していない」と嘆いたりする。その種の悲壮感も果たして足が地についたものだろうか。

《日本Ⅱ世間》論の人々は、同窓会・文壇・大学の学部・学会などを《形を持つ世間》と言っただが、それにあたる集まり方はほぼそっくり西洋にもみとめられる。これから取り上げるドイツ語の Verein (フェルアイン) や英語 association や club はその代表的な形態である。

また《形を持たない世間》(こういう分類が適切かどうかはともかく)にあたるものなら、西洋にも隣近所やクリスマス・カードをやり取りしたり贈答を行ったりする関係がある。たとえばナツハバルシャフト (Nachbarschaft 英 Neighborhood) という語がある。歴史学では中世に遡る隣人組を指すことがあるが、近代では主に隣人関係である。これには西洋各国でも社会学や民俗学が関心を寄せてきた経緯があり、研究成果も蓄積されている。一例を挙げれば、葬儀への参加は隣近所などの程度までの範囲が義務的となつていくか、同じくクリスマス・プレゼントをめぐっては贈る側と貰う側の期待と心理的拘束性の範囲はどうか、といった調査である。

筆者が感じ、また多少調べたところでは、右に挙げた同窓会などの諸集団や隣近所に相当する人間関係の濃密なのが西洋で、それが(一概には言えないが総じて)希薄なのが日本という見方もできるくらいである。言い換えれば、過去はともかく現代の日本では、良

くも悪しくも安定ないしは固定した中間集団をめぐってはあいまいなところがある。それゆえ《日本Ⅱ世間 vs 西洋Ⅱ社会》論者が想定しているのとは逆の現実が広がっていると書いてもよい。これは思い切った図式化だが、ともあれそうした構図をドイツ社会について取り上げようと思う。

(二) フェルアインに代表される中間集団の密度が高いドイツ社会

《日本Ⅱ世間》論者が空白のままに残した西洋における個人と(大きな)社会の間をうずめる領域については、珍しい文献を探して証明するには及ばない。多くの人々が知っている現実の諸相に注目すれば十分で、そのため本稿の半分は、日本でも話題になる事象をとり上げた。

と共に、西洋でなされている研究との接続をも欠かさすわけにはゆかない。そこで、ドイツの日常研究のリーダーであるヘルマン・バウジンガーの研究に裏付けをもとめようと思う。バウジンガーはドイツ民俗学の改革者として知られている。特に初期には社会学への接近に特色があり、また研究の性格から《日常の解明者》とも評される(Bausinger 2006)。そのバウジンガーがさまざまな著作で特に取り上げたのは、フェルアイン(Verein)と呼ばれる結集形態であった。

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

もっとも、日常的な結集形態はフェアインだけではない(あるいは狭義のフェルアインだけではない)。他の形態について少し挙げれば、たとえば教会に参集する信徒の集まり(宗教的な意味でのゲマインデ)がそうである。あるいはフェルアインよりも古くから行われてきた結集形態の呼称では、先に挙げたナツハバルシャフト(隣人関係)もある。

今回は、そうした関連事象をも併せつつ、フェルアインに絞ろうと思う。またフェルアインという耳慣れないドイツ語を原音で通すのはいかにも気が利かないので、クラブないしは組合、あるいはクラブ・組合と連記する。しかしそれを一律にそうするわけにもゆかない。協会や社団法人の語をあてるのが適切な場合もある。

なおここではドイツ語圏を対象にしているが、それは筆者の準備が限定的だからである。実際には、ここでの説明は、ドイツ以外の西洋の国々の社会にも多かれ少なかれあてはまると思われる。

(三) 独和辞典における「フェルアイン」の説明

簡便かつ常識的な手続きとして、ドイツ語学習者やドイツ語の文章を読む人が普通にもちいる現行の独和辞典ではフェルアインがどう説明されているか、まずそれを見ておきたい。

a. 郁文堂『独和辞典』

Verein 共同の目的をもつ個人加盟の団体、協会、クラブ：「法律」
 社団 Verein Deutscher Ingenieure ドイツ技術者協会（略：VDI）
 Sportverein スポーツクラブ：「法律」eingetragener (od. Eingetragener)
 Verein 社団法人（略：e.V., E.V.）das ist ja ein seltsamer ～ あれは
 全くおかしな連中だよ。In dem ～ bist du? お前もあの仲間なのか。?
 In ～ mit Jm. 或人と協力（提携）して 「戯」in trauten ～ （反目
 し合う相手と）をも親しげに。

b. 小学館『独和大辞典』

Verein 1 a) (共通の目的をもつて集まった人々によって設立され
 た) 会、協会、団体、社団、結社、組合、クラブ (Verein の連合
 体はしばしば Verband と呼ばれる → Verband 2 a) : ein
 eingetragener (Eingetragener) Verein 略 e.V., E.V. 登記済社団
 Verein Deutscher Ingenieure (略：VDI) ドイツ技術者協会 (1856
 年設立) Fußballverein サッカー協会 Tierschutzverein 動物愛護
 協会 einen Verein gründen (stiften) 会を設立する eine Verein
 auflösen 会を解散する einem Verein beitreten (angehören) 会に
 入会する (所属する) aus einem Verein austreten (ausgeschlossen
 werden) 会から脱会する (除名される) in einen Verein eintreten
 会に入会する。 — 以下略 —

c. 三修社『新現代独和辞典』

Verein ① 会、協会、団体、結社、学会、クラブ ② (法律) 社団
 法人 ③ 連合、合同、共同 ◆ im Verein mit 3 . . . と共同で /
 eingetragener Verein 登録法人 (略：e.V.)

ドイツで刊行されている辞典・事典類はここでは省くが、右の独
 和辞典でも、ドイツの国語辞典が踏まえられている。たとえば標準
 的な国語辞典の一つヴァーリヒ『ドイツ語辞典』の Verein の記述
 を見ると、各種の独和辞典にもそれが生かされていることがうかが
 える (Wahrig 1977, Sp.3917-18)。また『ブロックハウス百科事典』
 では、フェルアインがかかわる民法とフェルアイン法 (結社法) の
 説明が厚い (Brockhaus Bd.6.1990)。

またフェルアインの具体的な団体名も、各種の独和辞書の見出し
 語となっている。たとえば小学館『大独和辞典』から数例を拾うと、
 次のような語が挙がっている。Fußballverein: サッカー協会
 Gesangverein (略GV) 合唱団・合唱クラブ、Gewerbeverein: 営業 (同
 業) 組合 Kriegervereine 在郷軍人会 Schützenverein (中世以来
 の伝統をもつ) 射撃協会 Sportverein (略SV) 体操 (スポーツ) 協
 会 Turnverein (略TV) 体操協会・体操クラブ Verkehrsverein
 観光協会、等々。

d. フェルアインの特徴

独和辞典によっても、フェルアインという組織ないしは団体の性格はだいたい明らかになる。その説明からも、次の三つの性格を読み取ることができる

(一) 設立されることによって成立し、また解散されることもある。
(二) メンバーとフェルアイン組織との関係では、個々人が加入や離脱ができ、またフェルアインの側からも個人の入会をみとめたり退会させることもできる。

(三) 辞書が法律の項目を設け、そこに略号「F.V.」を挙げているように、登記を済ませて法人の性格をもつことが多い。辞典はそれに社団法人や登録団体や登記済社団の訳語をあてている。ちなみに社団法人としてのフェルアインにかかわる法律は「フェルアイン法」(Vereinsgesetz 結社法)で、現在の法律は一九六四年に制定された。それは改正法であり、前身は一九〇八年に制定された「帝国結社法」(Reichsvereinsgesetz = RVG)である。これ自体も、以前からドイツ語圏諸領邦で関連する法がおこなわれていたのを整理したという性格にある。

(四) 法人格(社団法人)としてのフェルアインとその訳語

独和辞典の説明が示すように、法人格としてのフェルアインは、概ね日本の社団法人と照応する。ここでは一般社団法人と公益社団法人の区別は横においておくが、法的な性格は同一でも巨大組織から極小のグループまで幅がある。日本の場合で言えば、経団連は一般社団法人、経済同友会は公益社団法人であり、片や町の手藝教室や詩吟クラブでも一般社団法人の場合がある。同じようなことは、ドイツのフェルアインについても言える。

法律にも言及しておかねばならない。ドイツのフェルアインは早くから日本にも無縁ではなかった。平成十七年改正前の明治三二(二八九九)年に施行された商法の第五二条第一項および第二項に《社団》と記されているのは、ドイツのフェルアインに照応するとされる。この明治以来の術語を元にして、そうした団体で法人の認可を得たものが《社団法人》と呼ばれることになった。またその条項の理論的背景はオットー・フォン・ギールケの『ドイツ団体法論』であった(ギールケ「庄子・訳」一四三―三六二)。同書は一八六〇年代に書かれた古典であり、またドイツ法の思想的な基本書である。そこでは中世以後ないしは近代前期とも言える十七・

十八世紀のフェルアインに関する第六四章「官憲的国家におけるフェルアイン制度」と、一八四八年の三月革命をはさむ時期のフェルアインの様相を踏まえた第五章「政治的・宗教的・精神的・道徳的および社会的な諸目的のための近代の自由なフェルアイン（社団）制度」の二章が設けられている。後者の章名からも知られるように、概括的には団体(ゲノセンシヤフト)の近代的な一形態としてフェルアインが解されている。

またフェルアインを《組合》と訳す事例も、遅くとも大正年間からみとめられる。具体的には、ドイツの社会民主党の結成当時からの指導者アウグスト・ベーベルの自叙伝(一九一〇—一四)が原書の刊行からそう時間をおかずに(英語訳からの抜粋の形で)大正一〇(一九二一)年に和訳されたが、ここではベーベルが所属した各種のフェルアインは組合と訳された。フェルアインは、大きく見れば生活協同組合や労働組合とも組織形態において似通うところがあり、日本語としてはイメージがつかみやすい。ただしベーベルの自伝は別として、《組合》に照応するドイツ語が常に Verein⁽³⁾であるわけではない。

(経済団体としての組合)

フェルアインに照応する日本語の術語が先ず商法に盛り込まれたのは、業界団体や特定の販売・流通目的の団体がその形態をとった

からである。概括的に言えば、フェルアインは商業活動とも深くかわる組織形態として発展した。すなわち業界団体の頂上組織や連絡機関の多くがフェルアイン、すなわち社団法人なのである。たとえば日本の自動車メーカーの業界団体の連絡機関には「一般社団法人 日本自動車工業会」(Japan Automobile Manufacturers Association)、同じく「一般社団法人 日本自動車部品工業会」(Japan Auto Parts Industries Association、略称：JAPIA 1938)がある。それに対応するドイツの組織は「ドイツ自動車工業会」(Verband der Automobilindustrie e.V.) である。

また「ドイツ自動車連盟」(Allgemeiner Deutscher Automobil-Club e.V. 略 ADAC) もフェルアインである。自動車ドライバーをサポートする組織で本部はミュンヘンにおかれ、会員数約一五〇〇万人誇り、ヨーロッパでは同業種の最大の団体である。「全ドイツ自動車クラブ」とも訳され、日本の「一般社団法人 JAF」にあたる。

もう一つ例を挙げると「一般社団法人 日本電機工業会」(JEMIA) は、電気製品の製造を営む正会員と、物流、販売、材料、工事などの電気機械に関連する事業を営む賛助会員で構成され、会員はよく知られている家電メーカーを含む二八〇社とされる。それに照応するドイツの組織は「ドイツ電気電子工業連盟」(Zentralverband Elektrotechnik und Elektronikindustrie e.V. 略称 ZVEI) である。

はりフェルアインである。

総じて業界団体については、日本の一般社団法人とドイツの e.V. はそのあり方において近似している。それは任意の業界でただちに推測できる。製造業界や流通業界から、園藝、加工食品、酒類の販売（全日本酒類販売店協会）、観光から葬儀業界のようなサービス部門に及ぶ。

また業界団体ではないが、ドイツの観光政策でよく名前が挙がるドイツ・ツーリズム・センター (Deutscher Zentrale für Tourismus e.V. 略 DZT) 本部はフランクフルト・アム・マイン) もフェルアインである。ドイツ連邦経済エネルギー省の委託を受けた主に国内観光に関係するマーケティング機関である。

さらに国際的な連絡機関もドイツではフェルアインと訳される。たとえば国連の専門機関である「万国郵便連合」はドイツ語では Weltpostverein 略称 WPV、英語では Universal Postal Union、フランス語では Union postale universelle どちらも略称 UPU、したがって Verein は英・仏語 Union とも照応する。

また NGO もそうであり、たとえば「国境なき医師団」(Médecins Sans Frontières 本部はパリ) はドイツ語では Ärzte ohne Grenzen、組織形態は Verein として分類される。

愛好家の団体も多くはフェルアインで、たとえば第二次世界大戦よりも前にドイツで結成され、ヴェルナー・フォン・ブラウンがメ

ンバーでもあったロケット愛好家団体「(ドイツ) 宇宙旅行協会」は Verein für Raumschiffahrt 略称 VFR である。

(学会組織としてのフェルアイン)

学会組織も多くが組合である。たとえばドイツ社会学会 (Deutsche Gesellschaft für Soziologie e. V. 略称 DGS) は一九〇九年にマックス・ヴェーバーやゲオルク・ジンメル等三人の提唱によって結成され、初代の会長はフェルディナント・テンニェスであった。ここでは学会組織がフェルアインであることに注目するにこだめる。次はほんの数例である。

ドイツ哲学会 (Deutsche Gesellschaft für Philosophie 略称 DGPhil) 1947

ドイツ民俗学会 (Deutsche Gesellschaft für Volkskunde 略称 dgV)

ドイツ外交政策学会 (Deutsche Gesellschaft für Auswärtige Politik e.V. 略称 DGAP)

今日では学界組織の多くが Gesellschaft と表記され、法人格として e.V. と表示されるが、かつては Verein を掲げていることが少なくなかった。これについては山田欣吾にドイツの歴史協会を対象にした研究がある (山田一九七九)。ここでは、一八一九年が最初の

節目で、この年に四か所で地域誌にかかわる歴史協会が成立し、そのうち三つの団体が Verein を名乗ったことが特筆される。

民俗学では、ドイツ民俗学会の直接の前身はベルリン大学のゲルマニステイクの教授カールヴァインホルトによって一八九〇年に設立された「ベルリン民俗学会」(Berliner Verein für Volkskunde)であり、次いで同じくヴァインホルトが準備していた同種の団体の頂上組織として民俗学協会連合 (Verband der Vereine für Volkskunde) が一九〇四年に発足し、これが第二次世界大戦後に今日のドイツ民俗学会となった(ヴェーバー・ケラーマン二〇一・一〇五以下)。

(五) 西洋に共通な結社としてのフェルアイン とそれへの注目の古典的な事例

本稿はフェルアインとは何かについて一般知識的な説明以上には踏み込まず、学説の流れは別稿に譲りたいと思う。ただ早い時期の、今日では古典的な意味をもつ三人の論説の存在にだけは言及しておきたい。一つは先に名前を挙げたオットー・フォン・ギールケである(ギールケ)。二つ目は時間的にはそれよりも早いアレクシス・ド・トクヴィル『アメリカの民主政治』第二卷(一八四〇年)の中の《アメリカ人の市民生活における団体》をあつかった三つの章である(ト

クヴィル)⁽⁴⁾。そこで説かれるのはアメリカのアソシエーションであるが、これはフェルアインの研究史でも、その早い事例として取り上げられる。それはアメリカの事例とドイツの事例、またトクヴィルの故国フランスの市民的結社がそれぞれ別のものでなく、同等ないしは近似したものと解されていたことを示している。三つ目は一九一〇年の第一回ドイツ社会学者大会におけるマックス・ウェーバーの講演で、印刷では二四頁のちょうど半分がフェルアインにあつた(M.Weber [1910], 1911, S.39-62)。《フェルアインの社会学》が喫緊の課題と説かれると共に、それは必ずしもドイツに限定したものとはされず、アメリカの事情についても特に仕切りを設けるとなく触れられている。

もつとも、今日となると、これらの古典的な諸例をもってフェルアイン研究を代表させるわけにはゆかない。特にドイツではその後ナチスドイツ期があり、また第二次世界大戦後にはその克服を課題として研究視点の転換が起きた。さらに一九九〇年代になると他ならぬ現今そのものの様相が強くなり、それを睨んで研究方法にも新たな工夫がこらされた。それらについても追々取り上げられることを考えているが、すでに研究の初期にあつても、西洋各国に共通ないしは近似した結集形態としてフェルアインが考えられていたことに注目しておきたい。

(六)日本でも知られているドイツのフェルアイン
—サッカー・チームを例にして

フェルアインという言葉自体は馴染みが薄いであろうが、何がフェルアインであるかとなると、誰もが知っているか、耳にしたこととの団体の種類を挙げる事ができる。代表的なのはサッカー・チームであろう。「バイエルン・ミュンヘン」、「ボルシア・ドルトムント」、「ハムブルガーSV」、「VfBシュトゥットガルト」、「SVヴェルダー・ブレーメン一八九九」、「FCシャルケ〇四（＝一九〇四）」、これらがよく知られているのは、この数年ないしは過去一〇年ほどの期間に日本人選手が在籍して活躍したことが大きく与っている。それらの球団がフェルアインであることは、フルネームを見れば明らかである。たとえば「ハムブルガーSV」は《Hamburger Sport-Verein e.V.》、「VfBシュトゥットガルト」は《Verein für Bewegungsspiele Stuttgart 1893 e.V.》である。このなかのVがフェルアインの略記号である。また先の独和辞典がe.V.とはeingetragener Verein すなわち登録団体ないしは社団法人の略記号と解説しているのを併せると、「ハムブルガーSV」は《ハムブルク・スポーツ組合 登録団体「or社団法人」》である。「VfBシュトゥットガルト」は《体育のための組合 一八九三年登録団体「or社団法人」》

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

人』》である。「SVヴェルダー・ブレーメン一八九九」(Sportverein Werder Bremen von 1899 e.V.) や「FCシャルケ〇四（＝一九〇四）」(Fußballclub Gelsenkirchen-Schalke 04 e.V.) などと同じである。なおFCはフットボール・クラブである。そしてこれらの例が示すように、フルネームには設立年次が付いている。

よく知られたサッカー・チームがフェルアインであることについては、もう少し解説が必要である。対比として日本の場合を見ると、サッカーも野球もプロ球団は株式会社である。ドイツではフェルアインであるのは、その活動の仕組みが異なるからである。日本のプロ球団はそれだけで独立した企業である。それに対してドイツのサッカー・チームを作っている組織の全体をみると性格が異なったものであることが分かってくる。もともと、日本でも、たとえばサッカーのJリーグを構成する会社のなかには一般社団法人への転換を視野に入れているところもあり、またリーグ全体を運営するのは「公益社団法人日本プロサッカー・リーグ」であるため、違いは決定的とまでは言えないかも知れない。

とまれ、もう少しドイツの実情に入ってゆこう。先ず私たちがブンデスリーガ一部の強豪として親しんでいるサッカー・チームは、「バイエルン・ミュンヘン」にしても「ボルシア・ドルトムント」(ボルシアはプロイセンの意、ライン地方がかつてプロイセン王国領であったことに因む)にしても、それぞれの組織のごく一部であ

る。それを手軽に見るにはHPが最新の情報を挙げているので、ここでもそれを用いる。それによると、二〇一八年七月一日の時点で所属メンバーは、「ボルシア・ドルトムント」では一五二〇〇〇人、「VfBシュトゥットガルト」は六一〇〇〇人とある。この大きな数字はサッカー・チームだけを考えたと奇妙である。中身をさぐる、と、二つの点が見えてくる。一つは、何万人というメンバー数は経営安定のために会費を収める一種のファンクラブを併せていることが少なくないことである。もう一つは、団体はサッカーだけでなく、数十種類のスポーツ関係種目を含んでいることである。それはテニス、水泳、柔道、障害者スポーツ、健康スポーツ等から、チェスや鼓笛隊にまで広がっている。したがって、サッカーでは強豪ながら、水泳ではマイナー・リーグという場合も珍しくない。

また大きなスポーツ組合では、特にサッカーが強豪である場合には経営規模が巨大になる。たとえば「ボルシア・ドルトムント」は球場だけでも数か所に所有している。そのため社団法人だけでは通せず、主にサッカー球場として使用される施設の運営を営利事業体として独立させ、それを組合の傘下におくという形態をとっている（元は百パーセントの子会社だったが現在はドイツ銀行が加わる株式会社合資会社）。

（サッカーに見るフェラインの広がり）

今、サッカーを話題にしたので、これを例にしてフェラインの広がりを見ておきたい。本稿では、多くの論者からの引用を敢えてあきらめて、ドイツ語圏において民俗学を日常研究へと発展させたヘルマン・パウジンガーの見解に絞ろうと思う。ちなみにスポーツはパウジンガーが若い頃から折に触れて取り上げてきた分野で、その論考と講演記録の多くは『スポーツ文化論』としてまとめられている。そのなかの「日常のなかの小さな祭りーサッカーの意義のために」の始めのところで、次のような試算がなされている（パウジンガー二〇〇六²²・七五―七六）。

DFBすなわちドイツ・サッカー連盟には二万を超えるフェライン（組合）があり、チームの数も一三万以上である。仮に一チームを一五人として計算すると（グラウンドに出るのが一人であるの言うまでもないが、控えのベンチの人員のほか、世話人、監督、救護係も数えなければならぬ）、すでにそれだけでほぼ二百万人である。その半数以上は、学校の生徒や若者であろう。この事情は、新聞で地方のスポーツ面をたしかめれば、ただちに納得できよう。実際、新聞の地方版には、よく知られたリーグだけでなく、レギオナルリーグ、オーバリーグ、クライスリーグを構成する多数のグループの名前

が挙がつている。さらに若者や学校の生徒のチームだけでもA1からF3にわたる。中くらいの大きさの町なら、通常、一つの組合のなかに凡そ二〇チーム位まで作られている。

実際には、フットボールで活動している人数は、組織されていないグループまで含めると、少なくともこの二倍になるだろう。つまり余暇をたのしんでいる日曜サッカー・プレイヤータチで、なかにはある程度固定していて、アイロニックな名前の付いているグループもある。《FCスリッパ》とか、《デュナモ鶏の目》とかである。さらにメンバーが固定していないグループも多い。

(七) 地域社会におけるフェルアイン

―《ドイツ人は三人よれば一フェルアイン》―

以上はフェルアインの広がり的一端にふれた。しかしドイツ人の間でフェルアインが話題になるときに先ず思い浮かべられるのは、むしろ身近で屢々小さな結集であろう。日常生活の一部となっている付き合いの次元の団体である。具体的には余暇や趣味やホビーの集まりである。また学校の生徒なら、放課後の活動の場がフェルアインである。地域の文化遺産の保存や美化運動や移民との交流や手藝や山歩きの仲間との交流の組織である。なかでも多数の学校生徒

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

にとつてはスポーツ活動の場はスポーツ関係のクラブ・組合である。ドイツの学校では体育の科目はあるが、実技に重点を置いた放課後の活動は学校外のフェルアインが中心である。各種の祭りやイベントも担い手はフェルアインである。法人となっていないフェルアインも多い。数からいえば、法人ではないさやかな団体の方がはるかに多い。しかし法人であるものとはどこまで行かないものとの間に決定的な差異があるわけではない。いずれにせよ、《家族と（国家や公共といった広い）社会の間を満たしているのは主にフェルアイン》とは、早くマックス・ウェーバーが指摘したところであった（M.Weber 1911:52）。

なお先にフェルアインを社団法人と重ねたが、それは登録まで進んだ場合である。登録については西洋人の習性として契約の重視などがよく言われるが、歴史的な経緯も含めて押さえる必要がある。《一九一九年に完全な結社の自由が導入される前には、すべてのフェルアインは定款を役所に届けて認可を得なければならなかった》からである（H.Schmitt 1963:565）。⁶⁾二〇世紀初め頃までは、祭りや共同部屋での冬場の仕事を兼ねた団欒といった慣習的な集まりの形態（これらは地域の上層部によって把握された⁷⁾）を除けば、一定の人数が定期的に集まる市民的な結集には、合唱クラブであれ体操組合であれ同郷人会であれ官庁の認可を要した。しかし十九世紀末頃には、雑多なフェルアインの申請に官庁が辟易していた節もあり、

過度の規制は時代に合わなくなっていた (H.Schmitt 1963 S.62)。

今日では法人としての登録へ進まない団体も多い。しかしそれらも別物ではなく、法人化は概括的に言えば状況次第である。公民館やスポーツ施設など公的施設の利用や補助金も登録のモチベーションとなる。いずれにせよ *Drei Deutsche — ein Verein* である。バウジンガーは、これをドイツ人の国民性を検証する一書『ドイツ人はどこまでドイツ的?』の小見出しに掲げた (バウジンガー 二〇〇〇「河野・訳」七四以下)。

《ドイツ人は三人よれば一フェルアイン》と言われる。もちろんこれは極端な言い方で、学問的な説明ではない。イギリスの社会学はウェールズ人について同様の指摘をしている。三人か四人のウェールズ人が集まれば、彼らは必ずコミッティーを作ると言うのである。それはアメリカ合衆国の住民にもついで言われている。アメリカでは誰もが三つか四つの団体のメンバーになっているとのである。それゆえ、特定の目的のために規則的な集いが組織され、人間が自宅の外にもとめる集まりが組織の性格をもつことは決して変わったことではなく、近代化されたあらゆる社会で見られるものであろう。しかしフェルアインへの思い入れはドイツ人の特徴として繰り返し取り上げられてきた。

大きな組織もさることながら、フェルアインの語でドイツ人が先ず思い浮かべるのは、やはり身近な集まりであろう。特に大都市を少し離れて広がる地方の生活における多種多様なモチーフによる小さな結集である。先に挙げたサッカー・チームも、それを含む大きな組織がフェルアインであるが、個々人が接しているのは、そのなかの個別の部門である。たとえば水泳であったり、健康スポーツであったりである。また祭りの保存会や運営団体も組合である。地域の施設の運営や自然環境の維持もそうで、たとえば河川や水門の管理は行政に加えてそれを保管する組合が存在する。博物館や郷土資料館の運営を支えるのもそうである。外国からの難民が町や村に定着するにあたって、行政だけでなく、そうした団体が仲介することが多い。さらに特殊な技術・ノウハウを要するものでは、地域の消防団がある。歴史的には十九世紀半ばに体操者の活動の一形態として結成された場合が少なくない。今日では消防団は全国規模のネットワークをもち、自前の訓練学校をも運営している。そうした日常生活のいたるところでクラブ・組合が機能していることについて、バウジンガーは次のように概観している (バウジンガー二〇〇〇「河野・訳」七四以下)。

ドイツにおいてフェルアイン (クラブ/組合) という組織形態に大きな意義があることは、統計が示している。ドイツ・スポー

ツ連盟の傘下にある組合だけでも、そのメンバーは約二三〇〇万人に上る。ドイツ歌唱連盟のもとにあるクラブのメンバーもほとんど二千万人である。ドイツ・アルプス・クラブや地域のワンダーフォーゲル・クラブのメンバーも合計すれば数百万人になる。それに加えて、小さな団体や組織が数多く存在する。ドイツでは成人の六〇%以上が少なくとも一つのクラブのメンバーとして会費を納めている計算になる。もつとも、ほとんどすべてのクラブ・組合では、《受動的な会員》の方が《活動的な》メンバーよりずっと多い。たとえば小さな都市の市長は、できるだけすべてのクラブのメンバーとなることを心がけている。歌唱クラブから体操組合まで、小動物飼育クラブから市民消防組合まで、ワンダーフォーゲル・クラブから家庭園藝組合まで、という具合である。しかし、高いポストの人物たちや企業家たちが多くのクラブ・組合のメンバーに《ならねばならない》事実、これまた地域の共同生活のなかでのクラブ・組合の意味を証していると言えるであろう。

村では、多くの面で等しいところがある。村の文化はクラブ・組合文化でもある。公的な文化施設が平等を重んじ地方分散的な構造であるにもかかわらず、一般的には、シンフォニーを演奏する大きなオーケストラも大きな演劇も村にはやってこない。文化生活は《手作り》であり、地元民によって担われる。

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

それに形をあたえるのは、何よりも種々のクラブ・組合である。地域の祭り行事となれば、そうしたクラブが連携して、祭りの夕べや上演すべき演目や行列やお楽しみの品物などを盛り込んだプログラムを作成する。あるいはそれぞれのクラブ・組合がプログラムを組むこともある。音楽の演奏、アマチュア劇団の芝居、夕べの催し、クリスマスの祭りなどである。それは村だけでなく、小さな都市でもあまり変わらない。小都市でも、文化的な行事の重要部分が種々のクラブ・組合によって担当される。それに対して大都市では、クラブ・組合の動静は、プロフェッショナルな劇場やオーケストラや博物館や画廊など活動の影に隠れてしまう。しかしそこでも、クラブ・組合活動の厚いネットワークは、中位や下位の層の人々には、《もつともらしい》文化よりも大きな意味をもちつづけている。

これに近いのは日本でもこのところ活発なヴォランティアやNGOであろう。ドイツの場合は、それが一世半以上にわたって発展した蓄積がある。逆に言えば、日本のヴォランティア活動やNGOも時間が経てばそこへ進んでゆく可能性がある。ドイツの田舎（都市の郊外もそうだが）に住むと、そうした団体に入ってはどうかという誘いを受ける。教会堂での日曜のミサの後などには、外国人の新顔を相手にした勧誘を見かけることすらある。

一三

しかし生活のあらゆる面でこういう組織が動いていることには、もちろんプラス面もあれば、マイナス面もある。これをうるさいと感じる人や、息詰まるようで耐えられないという人も当然いる。ちなみに先に日本の識者が、日本では《同窓会、会社、俳句の会、文壇、大学の学部、学会など》また《隣近所や、年賀状を交換したり、贈答を行う人の関係》を挙げて、欧米にはそうしたしがらみがないかのような論説を繰り返していたが、それにあたるような人間関係の密度の高さは日本の比ではない。それにはクラブ・組合は定款を掲げ、それによって枠付けられた集団であることが関係している。もちろん、規約が明示され、メンバーかそうでないかが文書的に固定されることがただちにマイナスの意味をもつわけではない。ポジティブな作用とネガティブな作用は事の両面である。

またドイツ語圏のクラブ・組合は、(絶対的ではないが)階層の違いを反映しているところがある。それはこの種類の団体が発展してきた歴史を背景にしている。そもそも始まりはともかく、クラブ・組合の初期の広がり十九世紀前半であった。自由主義と国家統一を旗印とした運動の担い手としてであり、体操と歌唱が二つの大きなモチーフであり、また言論の自由をもとめる出版・新聞・印刷もかかわった。その担い手は市民階層(ブルジョワ)であり、また大学生(エリート)であった。それに対して十九世紀後半が進むと共に、社会主義思想によって進展した労働運動の一部として労働

者もまたクラブ・組合を結成するようになった(パウジンガー二〇〇〇「河野・訳」七七)。

フェルアインは政治的にニュートラルではなかった。保守的な目標をになうことに強く傾き、その意味では市民的な勢力圏の拡大に役だった。また十九世紀の六〇年代からは、市民のクラブ組織は、プロレタリアートのクラブ組織や連合組織と競合するようになった。労働者はまた独自に体操組合や歌唱クラブや教養クラブを設立し、それらの組織はまた社会主義の諸政党と近い関係に立っていた。もつとも労働者によるクラブ・組合も、活動内容の点では市民のクラブ・組合とそう違ってはいなかった。スポーツ活動は似通っており、歌謡類でも市民の歌唱クラブと同じ歌がうたわれることも多かった。しかし、独自のアクセントの置き方への動きも見受けられた。スポーツの分野では、労働者のクラブ・組合の場合には、試合に重点をおくのではなく、皆なで一緒に身体を動かす形態が前面に出るようになった。労働者の歌唱クラブでは、ロマンティックな歌謡類に加えて、自由を歌う種類が入ってきた。労働者の教養クラブでは、実際の教養を磨くための練習に加えて、合理主義的な世界像を教えることが重要な役割を果たした。

突き放して見るならば、上・中流市民のクラブ・組合と労働者のそれとが競合して発展した。また第三の推進母体としてキリスト教会も加わった。それは特に社会主義の広がりのおかげで、労働者階層が教会から離れる動きを強めたことへの対抗措置という面もあった。ちなみにギュンター・グラスの小説『猫と鼠』（一九六一年）のなかに、ドイツ領であったダンツイヒ（グダニスク）のこととして、こんな一節がある（グラス「高本・訳」一九七七：一六）。

僕たちの体操の先生、マレンブランドとかいう高校教師は、シュラクバルの指導的なルールブックを書いたので、スポーツ関係者のあいだでは有名であったが、彼はマールケに、体育の時間中、紐のついたドライバーを身につけていることを禁止した。マールケの首にぶらさげたお守りについては、マレンブランドは文句をつけなかった。なぜなら、彼は体育と地理のほかにも宗教も教えていて、戦争の二年目までは、カトリック労働者体操協会の残っている人たちを鉄棒の下や並行棒へ連れて行くことのできる人だったからである。

シュラクバル (Schlagball) は一種の野球で、革製のボールを自分で投げ上げて、細いバットで打ち、当たれば出塁して走る。また鉄棒や並行棒など器械体操はフリードリヒ・ヤーンが基礎を据え

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

た体操 (Turn) の中心に位置し、そのため今日では Turn は狭義では器械体操を指すようになっていく。そうしたヤーン以来の体操組合の十八番に加えて、ここでは手がけられないか比重が低い種目に別系統の団体は進出した。カトリック教会系の活動家とシュラクバルという組み合わせもそうである。またナチスが擡頭すると、同じ民衆層をめぐって社会主義勢力、キリスト教会、ナチスが三つ巴で競合した。グラスの小説はそれを描いているわけではないが、そうした時代の片鱗を映している。なおここでの《カトリック労働者体操協会》の原語は ein katholischer Arbeiter-Turnverein である (Grass 1961:113)。

ともあれフェルアインが政治的な傾向と重なっていることは伝統でもある。しかしまた、二〇世紀が進むと共にドイツ近代化の一翼をになったトゥルン (体操) とイギリス型のスポーツの融合が図られる過程で、スポーツの不偏不党も一方の原則になっていった。しかし区分は政治的な立場だけでなく、経済的な余裕とも関係する (バウジンガー二〇〇〇「河野・訳」七八)。

今日では、すべてのクラブ・組合が、事実上、政治的にニューラルである。だからと言って、諸々のクラブ・組合の自己主張にさいして、政治的な差異、またとりわけ社会的な差異を反映させることが排除されるわけではない。中規模の都市でも二

一五

つか三つの歌唱クラブが活動していることが多いが、あるクラブには土地の名士や学者や商人があつまり、別のクラブにはやや下積みのホワイトカラーや労働者があつまるのである。

クラブの目的も社会的な区分を見せていることがある。一〇年か二〇年前までは、テニス・クラブは排他性が強かった。やがて豊かさの幅が広がり、また特にボリス・ベッカーやシユテフィ・グラフの活躍が刺激となってテニスがスポーツとしてブームとなり、それはスポーツ・クラブに占めるテニス関係の数の増加とテニスに特化したクラブの非常な増大につながった。今日では、中規模の村でも、野外のテニス・コートがあるのが普通である。それどころか屋内テニス・ホールすら珍しくなくなっている。そのため、《今は、皆がテニスをする》ともよく言われるが、やはり誇張の面がある。たしかに裾野が著しく広がりはしたが、依然、テニスは経済的に余裕のある少数者のスポーツという性格を残している。

それはまた大きな社会的な動きにもつながってゆく、クラブ・組合は、選挙における集票の単位となつていふことがある。パウジンガーは、一九九〇年のドイツ・スポーツ連盟四〇周年記念ハノーファー大会での講演のなかで、次のようなことを言っている(パウジンガー二〇〇六a:111)⁽⁸⁾。

小都市、とりわけ村では、スポーツ・クラブがコミュニケーションになつていふことがなお少なくありません。バイエルンでの選挙の敗北後、SPD(社会民主党)はスポーツ組合についても洗い直しをおこないました。そこから見ると、選挙の敗北は当然の結果でした。彼らが知ったのは、四二〇人を数えるクラブ・組合の会長のうちSPDの党員は二七人にすぎないという現実でした。少なくとも小村では、クラブ・組合は村そのものなのです。

歴史をたどると、もともとクラブ・組合は特定の主義や政治的主張をもった団体として始まった面がある。補足すると、クラブ・組合は保守的であることがよく話題になる。これは保守党の性格にあるキリスト教民主同盟やバイエルン州のキリスト教社会同盟の支持団体という意味に限定されるのではない。社会民主党の支持単位であることも少なくない。つまり現行の体制の一部なのである。そうした広義での保守性がクラブ・組合を安定したものにしていふ。

(八) クラブ・組合と行政

それは決してネガティブな要素とは言えない。特に地方行政では、市長や村長は一〇団体以上のクラブ・組合のメンバーであり、市議会議員や村議会議員は五ないしは六団体、あるいはそれ以上の団体数のメンバーである(少なくともそうであることが望まれる)。そ

のため行政とクラブ・組合の間に人的な重なりがあり、これが一種の潤滑油の役割を果たしている。

他方、日本のN G Oやヴォランティア団体はそこまで進んでいない。そうした団体から候補者が出て県知事や市村長が生まれることもあるが、一般の傾向としては、行政のトップや幹部はN G Oには警戒心がはたらいて身構えてしまう。相互の関係が社会的に定着していず、おそらく目下は手探り状態なのであろう。

ドイツでも日本でも、役所は概して官僚主義で、また役所のなかでも部局の間には高い壁がある。一人一人の専門家意識が強いドイツではなおさらである。それが故によりいっそう補完的な何かが必要になるのである。ドイツの地方行政では、クラブ・組合の厚い網の目と行政とのあいだの人的な重なりが、相互の基本的な了解に寄与している。もとよりそのバランスと調整は課題をふくんでいる。

筆者の知見はごく限られたものだが、観光の分野で若干の経験をもった(河野二〇一七)。先に挙げたD Z T (ドイツ・ツーリズム・センター)には約一五〇種類の観光街道が登録されている。ドイツでは(ヨーロッパ全体でもその傾向があるが)、観光地は単一のスポットではなく、街道として編成されていることが多い。それによつて一か所では成り立たない観光地や分散した観光資源が一つの脈絡にまとめられる。日本でもよく知られているロマンティック街道は

その比較的早い事例で、戦後の占領軍で引き続きN A T O駐留軍として金銭的に豊かなアメリカの軍人・軍属やツーリストに分かりやすいことを骨子にして一九五〇年代に整えられたのだった。「ロマンティック街道」という大味な名称もそこから来ている(河野二〇一四)。それはともあれ、観光街道となると多くの自治体をまたぐことになる。しかも新しい観光街道が絶えず企画されている。

その多くはポピュラーになる前に淘汰されてしまい、表面には現れない。そうした動きのシステムが分からなかつたので調べてみたのである。すると発案と推進の中心は、やはり市民の自主的な動きであった。クラブ・組合にまで行かないグループのこともあるが、そうしたグループが、その計画した街道沿いのグループと連絡をとつて案を練り上げてゆく。民間グループ間の折衝がめずらしくなく、それが交渉の一つの類型にまでなっている。またそうした動きの途中ではじめてフェルアインとして目的が掲げられることもある。それまた単一の広域的なクラブ・組合のこともあれば、各地域のクラブ・組合の共同の推進のこともある。さらにその過程では核になる施設(たとえば博物館)も必要で、その一室に推進本部がおかれる。そして脈があるが見えてきた段階で行政がかかわってくる。そのときも人的な重なりが一定の意味をもつ。そうした成否を飾にかけるような前段階を踏まえているため、行政がかかわるまでになつた案件では失敗がかなり避けられる。役所が耳をかさないという不

満も多いが、ある程度の割合でそうした連繋がさまざまな分野で機能しているのがドイツ社会のように思われる。

(九) 学校児童のスポーツの担い手としてのクラブ・組合

ドイツにおいてフェルアイン（クラブ・組合）という組織が社会的に確固たる存在であるもう一つの大きな要因は、学校スポーツの補完にある。補完と言うより、むしろ学校児童の体育ではクラブ・組合の方が主体である。ドイツの学校を見ると、街中の建物だけで、グラウンドを持たないことが多い。必要な場合は、市町村のグラウンドを使う。大学でも体育の授業は通常は設けられていない。それを埋めて余りあるのが地域のクラブ・組合で、それがスポーツ大団ドイツの土台を作っている。

そのシステムは、先のプロ・サッカーチームから見えてくる。日本でもよく耳にするサッカーのブンデスリーガは一部から三部までである。その下にセミプロリーグとして、四部から一〇部までがある。つまり全国規模ではなく《レギオナルリーグ（地方）リーグ、オーバー（ほぼ州の範囲）リーグ、クライス（郡）リーグであり、《さらに若者や学校の生徒のチームだけでもA1からF3にわたる》。それは、スポーツ選手志望者が成長と共にたどる道筋でもある。し

たがってスポーツの実習では学校は関係がなく、教員による放課後の部活指導もない。サッカーの入門書を見ても、《学校の教師は年齢的にも技術的にも実技指導には向かない》といった記述があり、また教育学では学校スポーツの時間をどうするかが課題になる。少なくとも、スポーツの実際は地域が単位なのである。と共に、学校の生徒が練習をする地域の施設の建設や維持には公的な資金がもちいられる。

このシステムのメリットは、学校教師が放課後の激務から解放されていることだけでない。生徒がその選択して通う運動やスポーツの種目において、多くの指導者（たいていはOG/OB）と接し、また年齢もグレイドも異なる生徒が同じ練習施設で時間を過ごす。日本のような、ひとりの指導員（学校教師）と同年齢の多数の生徒という構図に較べると、指導員にも生徒にも幅があり、どちらの側からも複眼的である。フェルアインはその複雑な構成において、すでに社会の性格を持っている。それゆえ《ドイツの子供はフェルアインのなかで社会人になってゆく》と言われる。

他方、日本の場合は学校教育の整備の過程で、体育実習が教育課程に組み入れられた。同時代のイギリスもドイツもそうではなかった。日本の実情はそれ以外には難しいものがあつたのであろう。しかしその結果、当初は軽微であつた放課後の部活の比重が高まるなかで身動きがとれなくなってきた。学校児童の行動は、家庭と学

校という二極で日本中が固まってしまっている。現在となれば、ドイツのような家庭・学校・フェルアインという三極の仕組みを見直す必要がありそうである。

学校教育へのクラブ・組合のそうした関わり方は、かなり古い歴史をもっている。近代国家としての学校教育の制度が整う前から体操組合がすでに活動していたのである。そのため、十九世紀の後半を通じて初等・中等教育が整備されていったとき、体育はそこに委ねられるか、その力を借りることになった。それは、学校だけでなく、軍隊もそうであった。徴兵で入隊した新兵は、地域の体操組合の指導者の監督の下に基礎訓練を受けた。体育について合理的・科学的な知識とノウハウをもっていたのは、民間の体操組合とそのネットワークだったのである。そうした国防への貢献もあって、体操組合の社会的な地位は堅固であった。と共に、それは体操組合の全国的な連合体や広域的な団体のトップには、名目的ではあれ、帝室の一員が就任するところへ進んで行った。軍隊の入営者が実家に出した絵葉書でも、『体操の父』フリードリヒ・ヤーンと、総裁の○○殿下と、その地域の体操運動の草分けとされる人物の三人が一組の写真になっている（河野二〇一四・口絵）。なおこれは極く概括的な説明であるが、各地域の経緯や団体それぞれの実態については、たとえばエトムント・ノイエンドルフの『ドイツ近代体育史』四巻と補巻にあたる数著によってかなり詳しく知ることがで

きる⁽⁹⁾ (Neuendorf)。とうつてい通読が適わない大部なものであるが、必要に応じて個別的に調べるには便利である。このノイエンドルフの名著のもとになったのはドイツ全土の体操組合の記念誌類で、おそらく千種類を超える資料が用いられている。

なお言い添えれば、体操組合は社会的な重みからナチスが翼賛をもとめ、組織としては組み込まれてゆくが、指導者のなかには硬骨漢も少なくなかった。ノイエンドルフ（一八七五—一九六一）は体操運動組織の有力者としてナチスに応じながらも、その姿勢を咎められて、ナチスの国家スポーツ指揮官によってボン大学講師の職をはじめ、すべての公職を解任された。またそれを機に聖職の勉強を始め、高齢で牧師となった（河野二〇一四・五六八以下）。

(十) クラブ・組合のマイナス面

クラブ・組合はその意義が説かれる一方、マイナス面もよく話題になってきた。一言で言えば、そこに没入して逆に社会性に問題をきたす人間が出てくることである。《組合人間》とも訳せる Vereinsmeier などがある。これまたバウジンガーの説明を引いておく（バウジンガー二〇〇〇）。

『報知週覧』という保守的で諧謔的な雑誌があるが、その十九世紀末のある号に、「組合人間」というタイトルでカリカチュ

アが載ったことがある。描かれているのは、髭を生やし燕尾服をりゅうと着こんだ男性だが、どこか専門馬鹿の風情をただよわせている。その人物が、別の紳士にこう語りかける。

《一言でよろしいんですが、御覧の通り、いささか弱っておりますね。スピーチをたのまれたんですが、どうして

よいのやら、かいかもく見当がつかません。ここだと、吾輩らは立派なクリスチャンの集まりでございます。気の知れた呑気な仲間どうぞございませう。重箱の隅を突つつく組合なんぞございますがね。》

ここでやり玉に挙げられているのは、いつも群れている会員中毒症の熱をおびた自己満足の様子である。それはまた、クルト・トゥホルスキーの詩「メンバー」を想いおこさせる。自分の組合のなかでいつも群れて生き生きとふるまい、最後は自分が集っていた組合がとりしきる葬式にまでいたる人物。アイロニクな批判を受けるのは、組合の幹部や嬉々として挨拶に熱弁をふるう人物の高揚した使命感とゆがんだバトスである。それに、ささやかな組合エリートの大層な形式主義、あるいは幹部への再任・重任・会員バッジ・名誉会員への推戴などを盛りこんだ虚栄のお祭り。こうして挙げる数々の特徴は決して空想の産物ではない。しかしちよつとデフォルメしている。つまりカリカチュアであり、それゆえリアルなポートレートそのものでもない。

クラブ・組合は、子供にとっては一般的に《社会人になってゆく場所》であるが、その反面、そこに埋没する自閉症的な人間の根城になりかねない面もある。もとより、それは団体が一般的にもつ画面でもある。

(一一) クラブ・組合成のモデルケース — 『新しい移住団地』から

フェルアインは、当然ながら、人間集団や地域社会に関心をむける学問分野の研究対象となってきた。そのなかから、ここでは特にヘルマン・バウジンガーが牽引してきた調査研究と考察を中心にしている。バウジンガーは一九五〇年代末からドイツ民俗学界に新たな方法的視点をもって登場したが、その出発点の一つは地域の実態調査であった。チュービンゲン大学の助手のときに学生・大学院生を含む調査グループをつくり、それを二人の後輩ヘルベルト・シユヴェートとマルクス・ブラウンと共にまとめた『新しい移住団地——民俗学・社会学調査』（一九五九）によって注目された（バウジンガー一九五九「一九六二」）。これは、東欧各地に住んでいたドイツ系住民が第二次世界大戦直後、各国政府から強制的に退去させられたことに起因する。

一般に調査結果は、調査者の視点によって規定されるものだが、

ここではそれがポジティブな成果を得ることになった。引揚民という対象者の特性をあまり意識せずに調査を進めた結果、そこで見えてきたのは、新しく集団が形成されるときに初期の様相であった。それまで何もなかったところに新しい町ができていったため、見ようによれば、ドイツ人が集住をつくるときには何がどのように起きるかというモデルケースであった。パウジンガーは、その調査を通じて、現代社会の特徴を把握することになり、以後の民俗学の改革にあたって多方面にわたる具体的なデータを得ることになった。二二か所二四団地の調査とその集計であるが、そこでの重要項目の一つが《団体形成》で、特にフェルアインの形成には注意がはらわれた。シュトゥットガルト市域に建設された数か所の移住団地から一例に限って団体形成の部分を抜き出す。

(事例) シュトゥットガルトーロートヴェーク移住団地

引揚民の受け入れが大きなモチベーションとなって始まった団地ながら、その地域の住宅不足や、西ドイツ国内からの移住者をも併せながら形成された大きな団地である。調査が行なわれたのは団地の発足から一〇年足らずの時期で、その時点で引揚民の比率は約半数であった。次の抜粋は、団地の概観と、フェルアインに関する部分である。

シュトゥットガルト市域ロートヴェークの移住団地の住民は一七〇〇〇人で、これだけ大きなものを団地と呼ぶのは難しいかも知れない。事実、これから取り上げる新しい移住団地のなかでは、ここが最大規模である。その計画と建設は、住宅不足が最も深刻化していた時期まで遡る。シュトゥットガルトーツツフェンハウゼン収容所は難民収容所としては最大級の施設で、そこには何千人もの人々が急ごしらえのバラックに暮らしていた。大半は、南東ヨーロッパのドナウ河地方から逃れてきた人々であった。そのほかには、シュトゥットガルト市民で住宅をもたない人々が大勢入っており、また北ドイツから新たに流入した人々も混じっていた。これらの人々は出目的には、東部地区からの避難民と、工業化の遅れた地域から職をもとめてやって来た人々であった。かかる状況のなかで、シュトゥットガルト市は、旧来の住宅地域から離れた場所に新しく独自の中心地をもった住宅空間を建設することを決定した。……建設にあたっては、ツツフェンハウゼンの東方、シュナレンベルクの北西麓が適地として選ばれた。そこは軍の演習場にする計画から、一九三六年に国有地になっていた。一九四五年以後、そこを住宅用地にあてることができたのも、そのためである。……

この種類の大きな住宅地域や衛星都市の計画作りにおいては、もう少し後なら基本的には文化センターが決定要因になるところであろうが、当時はまだそうした考え方はなかった。建物も、中枢機能をなう施設の数もなお増加の途上にある。すでに存在するのは、次の諸施設である。プロテスタント教会堂と牧師館ならびに教区センター一か所、カトリック教会堂一か所、プロテスタント教会系とカトリック教会系の幼稚園それぞれ一か所、小学校三校、中学校一校、ギムナジウム一校（ただし校区はツッフェンハウゼン全域を含む）、家政女子学校一校、郵便局一か所、遊園地数か所。

住民の出身地については、正確なデータは見当たらない。しかし一九五五年四月にジルヒアー校において、同校の生徒を対象に行なわれた統計がある。その数値は、住民全体に適用しても、かなり実態に近いと思われる。「住民構成の比率表を省略」

故郷を追放された者や避難民の比率は、この時点までにほぼ五〇%までに低下しているが、これ自体が典型的な推移と比べてよい。また西ドイツ出身者の約半数は地元シュトゥットガルトの人たちである。さらに、ヴェルテムベルクの他の地域からの移住者も少なくない。このためシュヴァーベン出身者の割合が移住団地の生活を大きく決定づけているのは不思議ではない。特に青少年のあいだでは、シュトゥットガルトの口語に近いか

たちで口語の平準化が起きている。またシュヴァーベン人たちの他、ドナウ・シュヴァーベン人たちも、この移住団地の色合いをつくるのに一役買っている。学校のうち一校がシュヴァーベンの有名な作曲家ジルヒアーの名前を冠し、他の一校はやはり有名な《ドナウ・シュヴァーベン人》レーナウを称している。

ドナウ・シュヴァーベン人の団結の強さは同じ出自によるだけでなく、収容所生活のという同じ運命をもったことにも根をもっている。その結びつきが如何に強力であるかは、ドナウ・シュヴァーベン特有の日曜園藝にもあらわれている。ロートヴェークでも、シュロートヴィーゼ時代の園藝地の様子をかたくなにまもっているのである。シュロートヴィーゼ収容所では、移住団地の仲間組織「新しいふるさと」をつくり、部分的には手作りでの移住団地の形成にかかわってきた。この仲間組織は今日なお存続して意義を発揮している。

「スポーツ組合ロート一九四五」(Sportverein Rot 1945)の前身は、「一」[号]フットボールクラブ・バチユカ一九四五」(1FCBatschka1945)である。この「バチユカクラブ」は、シュロートヴィーゼでそれが果たしていた役割を、ロートヴェークでもかなり長期にわたって担わなければならなかった。ロートヴェークにスポーツ広場ができたのは、よくやく一九五八年末だったからである。メンバーは四〇〇人を超すが、会長の話で

は、出身地の内訳は、八〇%強がユーゴスラヴィア、一五%がかつての東部地域で、ドイツ国内は僅か五%である。このクラブのふるさと意識については、クラブが一九五五年に一〇周年を盛大に祝ったことが如実に物語っている。

同じくシュロートヴィーゼで結成されたユーゴスラヴィア・ドナウ人の同郷人団体も新しい移住団地で集まりを維持している。スポーツ組合の名称変更は象徴的かも知れない。スポーツ組合は、団地全体の代表の性格をますます強めているからである。この他、教会生活もドナウ・シュヴァーベン人に活気をもたらしている。特にプロテスタント教会の男性グループは、他の教区に見られるよりも活発に活動している。

同郷人団体的な視点は、古い集団づくりにおいては、その意識が低下しつつある。それがあきらかにみとめられるのは、家庭や近隣の互助活動においてである。この方面での女性たちの親交は、しばしば、同じ学校や遊園地に通う子供たちを超えるほどである。「東部出身ドイツ青少年グループ」(Deutsche Jugend des Ostens = DJO)という若者の集まりには、地元ヴェルテムベルクの人々もかなり入っている。

〔訳注〕★シルヒャー (Friedrich Slicher 1789-1860) ヴェルテムベルク地方の一角レムス・ムル郡の今日のヴァインシュタット市域シュナイト (Schnait / Weinstadt) に生まれ、テュービンゲンに没した作曲家。「ローレライ」で知られる。

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

★レーナウ (Nikolaus Lenau 1802-50) ハンガリー王国時代にその版図であったルーマニア西辺に生まれ、ウィーンで没したオーストリアの詩人。永くシュトゥットガルトに住み、シュヴァーベン詩派に数えられる。

幾つか注目すべきことがある。団地の形成と共にさまざまな結集ができていったが、最も早くつくられ、また安定した集団は教会が中心であった。また児童が学校へ通うことに因んで父母や保護者がつくる集まりもある。それに重なってこの団地の場合は、引揚民がそれに見合った結集をみせた。核になったのは避難民の収容所時代の団結で、それを引き継ぐかたちでスポーツ組合がつくられた。かつてのふるさとを名称に冠した「一」号「フットボールクラブ・バチユカ一九四五」(1.FCBatschka1945)である。この名称は幾つかのことを示している。Batschkaは旧ユーゴスラヴィア「今日ではセルヴィア」のBačkaで、ベオグラードの北西、ドナウ河とチサ川に挟まれた地域である。したがって追われた元の故郷への追憶を結集核にしていることになる。と共に、いかにも本格的なスポーツ組合の名称を掲げているのはほほえましい。年号は設立年で、先に挙げた「SVヴェルダール・ブレーメン一八九九」や「FCシャルケ〇四(一九〇四)」といった歴史のあるスポーツ組合に見られるのと同工であるが、この場合はずっと若く、しかも追憶的な収容所時代の年次である。と共に《「FC」をも付けている。「一FC

カイザースラウテルン (1.Fc Kaiserslautern e.V.) や「1.Fc ニュルンベルク」(1.Fc Nürnberg) 等ブンデスリーガのチームでも見かけるこの頭の数字は、本拠地の市町村において最初につくられたスポーツ団体や最初のサッカー・チームであることを示している(したがって二や三を冠することはめったにない)。この場合は「ロートヴェーク移住団地」における第一号のサッカー・チームの表示である。その点では、立脚する場所はロートヴェーク団地全体であることが当初から意識されていたことになる。ちなみにこのサッカークラブは今も続いており、社団法人《Sportverein Rot 1945 e.V. 略称 SV Rot》としてセミプロにあたるクライス(郡)リーグ(フェアバント・リーグとも言う)頂点のブンデスリーガ一部から数える(とほぼ九部にあたる)に在籍している。アマチュア・リーグや学校生徒の部門までを併せると十五部ないしは十六部になるなかでは中堅下位であろうが、健闘しているとは言えるだろう。その間、何度か経営危機によって近隣のスポーツ組合との合併も検討されたが、それを乗り切ってきたからである。知名度のあるプレイヤーが在籍したこともあるが、出自然的に団地創建当時の引揚民の関係者ではない選手がほとんどである。かなり引揚民色の強いロートヴェーク移住団地であったが、その後、一般の住宅団地と変わらないものとなつてゆく徴候を、バウジンガーたちの調査は一九五〇年代末にすでにつかまえていたのである。

(二二) 保守化するクラブ・組合をめぐる攻防から

フェルアイン(クラブ・組合)というドイツ社会を分厚く覆う結果形態について日常研究の観点からメスを入れた代表者がバウジンガーであることに注目してきた。その取り組みの一つに、一九九五年七月にドイツ・スポーツ連盟(DSB)のワーキング週間におこなわれた「組合スポーツは過去のもの?」という講演がある。同年中に連盟が編集した報告書に掲載された後、二〇〇六年の『スポーツ文化論』に収録された。その中に、フェルアインの保守化とそれに対する若者たちの反抗を分析した一節がある(バウジンガー二〇〇六:四九―五一)。なおその部分は、鋭敏な社会批判家で、バウジンガーが親しかったハンヨースト・リックスフェルト(当時はフライブルク大学講師)のフィールドワーク報告が材料になっている。¹⁰⁾

今日では、組合は、伝統的な価値を代弁し、伝統的な活動を容易に可能にする組織と解せられることが多い。……そのため、組合は世代対立へも延びていった。むしろ、フェルアインという言い方をめぐる対立である。もし伝統的な組合的種目を頭から無視して(主に若い人々のあいで見られるように)特定の目

的を追求するグループにあつまるなら、そうした集まりは、伝統の守り手からは組合とはみとめられない。また、そうした革新者たちの方も、組合と見られないことに価値をおくのが一般的である。この種の緊張関係の見本は、ほとんどどこでも見ることができる。一例を挙げると、フライブルクの民俗研究者ハンヨースト・リックスフェルトが、ツエル・アム・ハマースバッハにおいて民俗学専攻の学生グループと共に調査をおこなった。シュヴァルツヴァルトの小都市で、工業に加えて古くから観光地としての伝統をも持っている。

調査は一九八〇年代の初めであったが、その頃、ツエル市の人口は三四〇〇人で、組合に会員として登録している人の数は三九二八人であった。奇妙に聞こえるかも知れないが、重複の登録で説明がつき、またその実態はこの二つの概数からただちに想像されるよりもさらに集中している。そこでは集中度も大きい。市役所のリストに載っているのは三四の組合であるが、新聞の地元面の記事は組合活動が圧倒的である。ローカルな権力構造の固定に組合が関係していることに触れたが、ツエルもそれが集中的に浮かび上がる事例である。市長は三つの伝統をもつ大きな組合の筆頭であり、また十一人の市議会議員の全員が、政党とはかかわりなく、どれか一つの組合の運営にかかわっている。それはまた逆の観点からも確かめることができる。市

の行政にかかわる最も重要な委員会は、十四の組合の代表者で構成されている。そこでリックスフェルトは次のようにまとめている。

《これによって、ツエル市で力をもっている伝統文化のシステムは、非常に閉鎖的なものであることが判明する。これは少なくとも、指導層、ならびに権力の形式的な構造についてあてはまるが、それは諸々の組合のヒエラルヒー的な区分とその運営の仕組みとかさなっている》

この閉鎖性こそ、一九七〇年代に新たな組合が結成された背景であった。その頃、登録団体（社団法人）「自主管理・若者センター《非常口》」という組合が誕生したのである。《非常口》(Notausgang)とはいみじくも言ったもので、若者たちは、既存の形式・内容ともに徹の生えた、傷をなめあっている閉鎖的な文化からの脱出を図ったのである。もっともその発足の集会は、これまでの組合とさして違わなかった。市議会議員が数人、他の組合の長たち、市長、それにカトリック教会の司祭も数人やって来た。若者たちが自力で（とは言え市からも小額ながら補助金を受けて）廃校になった学校の地下室に《ユーツェ》(Junge若者センター Jugendzentrum)を独自に設けたとき、それは称賛につつまれた。市長は、若者たちの行動を余暇に意義あらしめるものとして絶賛した。しかしその余暇形成は、どう見て

も、あまり意義あるものとはならなかった。やたらに音を立て、突っ張った風があり、アイロニックではあれ政治性をも帯びていた。デイスコの上にはスローガンが掲げられた。

《プロレタリアートの階級闘争には君も必要だ！》

しかしデイスコの入口のこの文言は、遅ればせの革命への意思表示ではなく、自己アイロニーであった。つまり、数年前にこの種のシユプツレヒコールで世を震撼させた世代に対する距離感の表明であった。しかしアイロニーは水ものである。アイロニーがそう理解されなかったために、痛々しくもおかしな結果に走っていった。市当局は、弁護士を通じて、看板の撤去をもとめたのである。そこで《ユーツエ》の面々は、それを塗りつぶして、新たな文言に書き替えた。

《英雄的にして勇敢なる門戸、ここにありき。一九八一年、

市長により、世界革命ここに圧殺されたり。》

それからわずか二、三週間後、伝統的な組合である町の吹奏楽団の創設二〇〇周年の祝賀行事が催された。市長は、ここぞとばかり、ブラスバンドの若者たちをもちあげた。

《健やかなる若人、有為なる青年、我らが諸々の組合においてそれが成し遂げられることは、皆さん方が正に示すところであります。決して、近頃、けたたましく音を立て、わめき散らしている自主サークルとやらによってではない

のであります。》

市長はさらに語気を強め、町の吹奏楽組合を範に挙げつつ若者論をぶった。

《余暇を漫然と過ごすことなく、有為の活動に身を投じ、何事かに献身する者》

そういう若者が今も大勢いる証しである、と言うのであった。ユーツエをターゲットに、前線が形成されたのである。とは言え、その後も解散にまで追い込まれたわけはもなかった。ここではこのケースを追跡するのはやめておこう。実際、そう感心できる事例でもないかもしれない。しかしここからは、多くのことがあきらかになる。ツェレの町の吹奏楽団に見られるように若者たちが活発にかかわっている組合がある（これ自体は疑いようがないが）一方、別の角度からは、批判やアイロニーが投げかけられる程度ではすまず、組合は根本的な疑念にさらされている。しかしまた、そこで興味深いのは、そうした若者のセンターもまた登録制の組合組織として設立されたことである。

多少ユーモラスにまとめられているが、基本は笑い話ではない。若者たちは、《既存の形式・内容ともに徹の生えた、傷をなめあっている閉鎖的な文化からの脱出を図った》のだが、その進め方は、少

なくとも形式面では既存のクラブ・組合作りと同工であった。集団形成の型は反抗においても踏襲され、おそらくそれ以外には考えが及ばないのである。もともと、最近では、クラブ・組合における人間関係の煩わしさを避ける傾向も強まっており、それに応える町のフィットネスクラブが盛況で、またチェーン店も幾通りか出来ている。しかし、そこで成り立ったコミュニケーションからグループが生まれると、それまたいつしか既存のフェルアインと同じ型になってゆく。よくも悪しくも集団形成の定型なのである。

(一三) 集団形成の東西比較へのスケッチ

世間と社会を以て日本と西洋の違いとする見解が奇妙であることを三回にわたって取り上げた。特に今回は、現代のドイツ語圏におけるクラブ・組合の現状を取り上げた。それにあたっては、ヘルマン・パウジンガーの日常研究の紹介を重ねた。もちろんなお不十分で、社会学と民俗学の主だった学説を整理することも必要だろう。またフェルアインだけでなく関連する結集形態も含めて歴史的な推移についても稿を改めて呈示したいと考えている。それゆえ結論を導くには早いですが、スケッチ程度に筆者の考えを記そうと思う。

おそらくドイツ語圏をも参考にしてであろうが、日本でも中間集団を育成する観点からの施策は何度から試みられてきた。二〇年前には団塊の世代の退職の波が早晩到来することを見越して地域

コミュニティーの重要性が当時の通産省の主導で議論になった。また今日は、文部科学省が牽引して地域総合スポーツ・センターの構想が進行している。それらの効果が期待できないわけではない。しかし社会の仕組みに遡って解きほぐすことも必要だろう。

たとえば、ドイツのスポーツ組合の年少部門では、多くのOG・OBがヴォランティアとしてかかわっている。年金生活者も多い。そこに注目すると、日本よりもかなり短い労働時間(約八割)、年金では日本を上回る所得代替率がシステムを支える条件として見えてくる。しかしそれが絶対的な要件とも言えない。(今回は歴史的な推移には踏み込まなかったが)ドイツのフェルアインの発展は十九世紀後半から二〇世紀前半で、当時は一日一〇時間労働が達成されていた。次いでスポーツ組合が今日の形態になったのは、第二次大戦後の混乱期から高度経済成長に差しかかる頃であった。それゆえ余暇の点では条件は良好ではなかった。つまり労働時間や年金といった物質的な条件が整っていないにもかかわらず、事態は進展したのである。その点では、パウジンガーがフェルアイン(クラブ・組合)は《自由》や《人間らしさ》を味わうことのできる場であったことに焦点をあてているのには注目してよい。

なお中間集団の重みが最もよくうかがえるのは、学校生徒の放課後の活動の多くがドイツ語圏では学校外に委ねられていることであ

ろう。ドイツの学校生徒の行動が三極であることを先に指摘した。私見では、教育に本質的に関係していることが、フェルアイン一般の社会的意義を決定的にしている。日本の場合はそうはならず、今も抜本的な変更は難しい。日本の二極構造は、近代化の過程でその必然性があったのであろうが、それには、次元の異なった二つ要因があったと思われる。よく教育の国家管理が言われるが、管理自体は目的ではないであろう。たしかに国家による一元的な教育制度であるが、その意義はむしろ効率性であつたらう。すなわち国民の初等教育期から成人直前までの多くの課題をこなすには国が主導する一元的なシステムは無駄がなかった。短期間に普及させるという目的にも適っていた。二つ目は、それが広く歓迎されたこととも関係する。要点は平等への希求であつたように思われる。日本の近代化の過程で、社会の現実がどうであれ、学校だけは平等を保障してくれる機関であつた。今日では横並び志向という、やや重心がずれた形になっている。ずれてきていると言うのは、平等志向と対になるのは国への信頼であるが、横並び志向と対になるのは国への依存だからである。信頼と依存は、似てはいるが異なつた心理である。信頼は自己確認を伴うが、依存は自己放棄である。それはまた、そろそろ現状が限界にきていることをも意味している。

以上を言うのは、中間集団がどういふ場合に発展し定着するかに関わるからである。ドイツ語圏のフェルアインに代表される中間集

団にはポジティブな面もあれば、ネガティブな面もある。ネガティブな面では、日本で強く見られる平等志向はドイツ語圏のフェルアイン（に限らずアメリカのクラブもそうであると思われるが）では満たされないだろう。（身分といつてよいかどうかともかく）社会的な立場の違いや経済的な余裕の程度はクラブ・組合の種類に反映されているところがある。たとえばテニスや乗馬のクラブ・組合は概して金持ちのものである。そのため労働者テニス・クラブもつくられきた。歴史的には上中流市民のクラブ・組合を追いかけるように労働者のクラブ・組合がつくられていったのだが、そうした階層区分の傾向は今も消えてはいない。その点ではドイツ語圏（や他の幾つかの欧米諸国）のようなシステムが日本の学校スポーツの代替となるには壁がありそうである。それは今後の日本の課題であるが、そうしたシステムが長い歴史をもつ西洋諸国ではシステムのマイナス面を補完する工夫もまた発達してきた。それも併せて、クラブ・組合などの中間集団が機能している。

制度にせよ集団の形態にせよ、それを欠いては社会が成り立たないところまで行かなければ、本来の意味での存在意義とはならない。日本の場合、学校の部活のシステムなどは根本的な改革が必要なところまで来ているが、惰性も強く、次の構図が描けないのが現状のように思われる。

先々回から始めて本稿に至る数篇は、元は世間論がおかしいこと

を指摘するものだったが、それ自体は難しい課題ではない。西洋社会の現実を見ることを促せば、それで済む。むしろそれを機縁に、これからのことを考えてみたのである。

文献

- Hermann Bausinger, Herbert Schwedt, Marx Braun, *Neue Siedlungen. Volkswirtschaftlich-soziologische Untersuchungen des LudwigiUmland-Instituts*. Stuttgart 1959, 2. Aufl. 1963. 次の抄訳を参照。H・パウジンガー／M・ブラウン／H・シュヴェート(著)河野眞(抄訳)「新しい移住団地―東ヨーロッパからのドイツ人引揚者等の西ドイツ社会への定着にかんするルートヴィヒ・ウーラント研究所による民俗学・社会学調査(抄訳・解説)」(一)愛知大学国際問題研究所『紀要』第九四号(一九九二)五三―〇二頁(二)第九六号(一九九二)九五―一三八頁(三)第九八号(一九九三)二四―一六三頁(四)第九九号(一九九三)一五―一八六頁
- ヘルマン・パウジンガー(著)河野眞(訳)『ドイツ人はどうまでドイツ的―国民性をめぐるステレオタイプ・イメージの虚実と因由』文編堂 二〇二二年
- Original: Hermann Bausinger: *Typisch deutsch – wie deutsch sind die Deutschen?* München: Beck 2000.
- Hermann Bausinger: *Sportkultur*. Tübingen Beck 2006.
- Ein Aufklärer des Alltags. Der Kulturwissenschaftler Hermann Bausinger im Gespräch mit Wolfgang Kaschuba, Gudrun M. König, Dieter Langewiesche*. Bernhard Tschöfen. Wien – Köln – Weimar 2006.
- Hinz Schmitt: *Das Vereinsleben der Stadt Weinheim an der Bergstraße. Volkskundliche Untersuchung zum kulturellen Leben einer Mittelstadt*. Weinheim a.d.B. 1963.
- Gerhard Wahrig: *Deutsches Wörterbuch*. Gütersloh / Berlin / München / Wien 1968, 21975.
- Max Weber: *Geschäftsbericht*. In: Verhandlungen des Ersten Deutschen

ドイツ語圏を例とした西洋社会の集団形成

- Soziologentages vom 19. – 22. Oktober 1910 in Frankfurt a.M. Reden und Vorträge von Georg Simmel u.a. und Debatten. Tübingen 1911.
- インゲボルク・ウェーバー＝ケラーマン／アンゼルム・アス・C・ビマー／ジークフリート・ベッカー(著)河野眞(訳)『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』文編堂 二〇一一年 原書 Ingeborg Weber-Kellermann / Andreas C. Bimmer / Siegfried Becker, *Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie. Eine Wissenschaftsgeschichte*. 3. vollständig überarbeitete und aktualisierte Aufl. Stuttgart-Weimar J.B.Metzler 2003.
- オットー・フォン・キールケ(著)庄子良男(訳)『ドイツ団体法論 第一巻 ゲノッツェンシャフト法史第四分冊』信山社 二〇一五(平成二七)ギョクスター・クラス(作)高本研一(訳)『猫と鼠』新潮文庫 昭和五二「一九七七」年 原書として次を参照 Günter Grass, *Katz und Maus. Eine Novelle*. Neuwied und Berlin [Luchterhand] 1961.
- 河野眞『世間 vs 社会』は『日本と西洋』を比較する基準だろうか(一)『愛知大学文学会』『文学論叢』第一五一輯(二〇一四年)三五―六八頁
- ―「世間」は日本社会の特異性か?―欧文の翻訳における『世間』の用例に即した検証―愛知大学人文社会学研究所『文学論叢』第一五五輯(二〇一八年三月)一五四―一三三頁
- ―「ドイツの観光街道に見る《線型》観光の可能性(一)」三愛知大学国際問題研究所『紀要』第一四二号(二〇一三)一―四九頁
- ―「ドイツの観光街道に見る《線型》観光の可能性(二)」ドイツの組合組織との対比」三愛知大学国際問題研究所『紀要』第一四九号(二〇一七)一―三二頁
- ―「民俗学のかたち―ドイツ語圏の学史にめぐる」創土社 二〇一四年
- ヘルベルト・シュヴェート & エルケ・シュヴェート(著)河野眞(訳)『南西ドイツ・シュヴァーベン民俗』文編堂 二〇〇九 原書: Herbert Schwedt & Elke Schwedt, *Schwäbische Bräuche*. Stuttgart 1986.
- A・トクヴィル(著)井伊玄太郎(訳)『アメリカの民主政治(下)』講談社 昭和六二年 フランス語原書はガリヴァール社版を挙げ Alexis de Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique*. Paris [Gallimard] 1961. 第二部の次の語章に於て II. Part. Chap. V De l'usage que les Américains

font de l'association dans la vie civile. Chap. VI Du rapport des association et des journaux. Chap. VII Rapports des associations civiles et des associations politiques.

(アウグスト・ベール) 波多野鼎(抄訳)『ベール自叙傳』大燈閣 大正一〇(一九二一)年 ドイツ語原文は次を参照, August Bebel, *Aus meinem Leben*, Bd. 1-3, Stuttgart, 1910, 1911, 1914.

山田欣吾「地域史研究と歴史協会—十九世紀前半のドイツにおけるその社会的考察」栗原福也・山田欣吾・米川伸一(編)『ヨーロッパ…経済・社会・文化…増田四郎先生古稀記念論集』(創文社一九七九)三七七—四一三頁

注

- (1) ここではナツハバルシャフトは(Nachbarschaft)直接には取り上げないが、その伝統的な意味については歴史民俗学の次の拙訳を参照、カール・ジーギスムント・クラマー(著)河野(訳)『法民俗学の輪郭—ドイツ語圏における町村体と民衆生活のモデル』文叢堂二〇一五
- (2) 同条は、会社法の最初の条項でもある。なお旧・商法のVereinに照応する《社団》の訳語については、訳者庄子良男による解説を参照、ギールケ『ドイツ団体法論 第一巻 ゲノツツセンシャフト法史第一分冊』信山社二〇一四(平成二六)年「訳者まえがき」三八頁
- (3) 参考までに言い添えれば、カール・マルクスの『資本論』第三巻を構成する論考中のその語や、『ゴータ綱領批判』にあらわれる《協同組合》は、マルクスが生産組織形態として関心を寄せていたとして回顧されるが、原語はkooperative Fabrikである。
- (4) 参照、トクヴィル「井伊・訳」『アメリカの民主政治(下)』一九二二—二四頁第五章「アメリカ人が市民生活で行っている団体の使用について」第六章「団体と新聞との関係について」第七章「市民的団体と政治的団体との関係」
- (5) 本稿の印刷直前に愛知大学で開催された二〇一八年一〇月二六日(金)

に愛知大学地域政策学部地域政策学センター主催で開催された第二回愛知大学スポーツビジネスセミナー「プロスポーツと地域との関わりについて—現状と今後」のなかで株式会社名古屋グランパスの広報担当佐藤剛史氏が講演「名古屋グランパスエイトと地域との関わり」への補足として将来の選択肢として一般社団法人化に言及された。

(6) ハインツ・シュミットの本書は特定の都市(バーデン地方のヴァインシュタット)を対象にしたモノグラフィであるが、最初の数章でフェルアイン一般の歴史がまとめられている。テュービンゲン大学に提出された学位論文で、指導教授の一人はヘルマン・パウジンガーであった。

(7) 参照、シュヴェート&シュヴェート『南西ドイツ シュヴァーベンの民俗』伝統的な村の生活におけるさまざまな集まりには村の運営者と教会の司祭・牧師が目を光らせていたことについて、多くの事例が載せられている。

(8) 本稿は一九九〇年の講演であるが、この箇所でもちいられている資料は一九八〇年の次の文献である。Walter Gloede, *Sport, die unbekannte Größe im politischen Spiel*. München 1980, S.171.

(9) 参照、Edmund Neundorff, *Geschichte der deutschen Leibesübungen*. 4Bde. Dresden 1930-32.

(10) ハンヨースト・リックススフェルト(Hanjost Lixfeld 1937-98) シーゲン(Siegen NRW)に生まれ、フライブルク(FB)に没した民俗学者。フライブルク大学講師。特にドイツ民俗学のナチズムとの関わりを関係者の経歴に即して克明に調査し批判的に整理した。